

若年者の職業イメージ（2）—JELS 報告

寺崎里水（お茶の水女子大学）

terasaki.satomi@ocha.ac.jp

1. 問題の所在

本報告では若年者の抱く職業イメージに注目して進路指導・職業選択の問題を考察する。彼らの職業選択に関する意思決定は「主観的に」「合理的」であるようにみえる。彼らが自らの希望する職業について語る時、いったいどのようなことばが用いられており、いったいかなる要因が彼らの決定を「合理的」であると思わせているのだろうか。社会的背景や性別、学力といった要因と彼らの職業イメージとの関連を探る。

2. 使用するデータ

本研究で用いるデータは、お茶の水女子大学21世紀COEプログラムの一環として行われている追跡調査 Japan Education Longitudinal Study 2003 (JELS2003) によるものである。JELS は3年ごとに実施する縦断的調査研究であり、JELS2003 とは2003年から2004年にかけておこなわれた基礎年次調査 (WAVE1) をさす。WAVE1 では、複数のエリアの、それぞれ小学校3年生、小学校6年生、中学校3年生、高等学校3年生を対象に、児童生徒調査 (質問紙)、学力調査 (国語、算数・数学)、保護者調査 (質問紙)、担任教員調査 (質問紙)、地域、学校の状況に関するヒアリング調査を実施した。

本報告では、東北地方Cエリアの公立高校3年生について、生徒質問紙調査のうち、将来やりたいしごとを自由記述で回答させた部分を主に利用する。Cエリアにおける生徒質問紙ベースの回答状況および分析に用いる質問項目は、それぞれ図表1、図表2のとおりである。図表2の「1) 父親・母親のしごとについて」および「2) 自分の将来の希望について」の質問すべてに何がしかの回答を記入した者641人を分析対象とする。

Cエリアは東北地方の人口9万人ほどの小

図表1 調査の実施状況(生徒票ベース)

	設定数	回収数	回収率
Cエリア	1022	968	94.7

◎Cエリアとは

- ・東北地方 人口9万人弱の小都市
- ・産業大分類別就業人口(平成12年度)
 - 第一次産業10%
 - 第二次産業30%
 - 第三次産業60%
- ・2004年7月実施
- ・市内県立・公立高校6校当該学年番皆調査 (JELS2003)

図表2 分析に用いる質問と回答方法

質問	回答方法
1) 父親・母親のしごとについて あなたは将来、お父さん(お母さん)と同じしごとをしたいと思いますか。なぜそう思いますか。理由を書いてください。 お父さん(お母さん)はどんなしごとをしていますか。	したい/したくないの2択 自由記述 自由記述
2) 自分の将来の希望について 家のしごとやお父さん、お母さんのしごととは関係なしに、あなたは将来、どんなしごとがしたいですか。そのしごとがしたい理由はなんですか。	自由記述 自由記述

(JELS2003)

都市である。Cエリアでは地域の高校階層構造の下方に私立学校が位置づけられている。生徒質問紙調査の他の部分からCエリアの特徴を、関東地方都市部Aエリアとの比較でみてみよう。

まず高校3年生になってからの遅刻を「全然したことがない」と回答する者の割合をみれば、Aエリアの21.3%に対し、Cエリアでは38.4%である。また、担任の氏名をフルネームで覚えている者の割合は、Aエリアではわずか55.3%でしたが、Cエリアでは79.6%で、大きな差がみられた。

次に通塾の様子をみれば、Aエリアでは「受験のための勉強をする塾に行っている」が25.8%であるのに対し、Cエリアではわずか4.6%にとどまっていた。「塾や習い事は、なにもしていない」という者がCエリアでは78.4%と高い割合を示していたが、受験塾に通ったり、習い事をしたりはしていなくても、

「家ではほとんど勉強しない」者の割合をみれば、A エリアの 55.2% に対し C エリアは 42.0% と低く、C エリアの高校生は家で勉強する習慣がついていると考えることができる。

C エリアの、学校に対するコミットメントの高さや、勉強に対する構えの違いは、「学校の成績がよいこと」を重要にする者の割合が高いこと (75.0%、A エリアは 52.3%) から明らかである。さらに、「学校は競争の場だ」という項目で、「とてもあてはまる」「まああてはまる」という者は 39.6% であり、A エリアの 24.8% とは大きな差がみられた。これらから C エリアでは、学校が生活のなかで大きな位置を占めているということがわかる。

C エリアと A エリアの中 3 の学力の規定要因を分析した耳塚 (2006a) は、受験塾や補習塾への通塾率が相対的に低く、「学歴蓄積度も相対的に低い C エリアの地域的狀況を考慮すると、学力調査の平均通過率がほぼ変わらないことは、学校や家庭による学力の底上げ効果があると推測してよい (同:6)」と述べた。さらに耳塚 (2006b) は、同じく中 3 を事例に、A エリアと C エリアの教育アスピレーションの規定要因の分析を行い、相対的な意味で、A エリアは「属性主義的教育アスピレーション形成」、C エリアは「業績主義的教育アスピレーション形成」が支配的である、と要約した。

耳塚の分析はいずれも中学校 3 年生を対象としたものであるが、C エリアでは相対的に属性よりも業績的要因の規定する力が大きく、学校教育に対する人々の期待が大きいということがいえよう。

3. 分析 (当日配布)

4. 結論 (当日配布)

5. 議論

若年無業者の研究に、彼らの用いることばに注目した研究がある。たとえば久木元は、フリーターの言及する「やりたいこと」ということばの多用・頻出に注目し、フリーターのもつ論理の内部に「自分の「やりたいこと」に忠実であることこそが就業をめぐる選択の

際に説得的な根拠となる (久木元 2003:78)」構造があるため、実際のやりたいことの有無に関わらず、「やりたいこと」を表明することがポーズとして成立していると述べた。さらに久木元は、単に多用・頻出という面だけではなく、「仕事」や「働く」ということをめぐる語彙のヴァリエーションの過小にも注目すべきだとした。

語彙のヴァリエーションの問題については、小杉 (2003) も、「仕事」や「働く」ということが限られた定型的なことばでしか語られておらず、それらの多くが否定的なイメージ—長時間労働や大規模リストラなど—であることにふれている。

ここでみたデータからは、高校生の「仕事」をめぐるヴァリエーションは否定的なイメージのものばかりとはいえない。むしろ高校生の将来の仕事に対するイメージには、フリーターに対する指摘同様、「やりたいこと」や「好きなこと」を大事にし、「人のため」になるしごとをしたい、という一定の傾向がうかがえる。したがって、久木元や小杉が指摘したような状況は、単なるファッションをこえて、広く若年者のあいだに流布している言語的資源の存在をうかがわせるものである。

(参考・引用文献)

久木元真吾 2003 「「やりたいこと」という論理—フリーターの語りとその意図せざる帰結」『ソシオロジ』148号

小杉礼子 2003 『フリーターという生き方』勁草書房

耳塚寛明 2006a 「学力・家庭的背景・地域」『JELS 第8集 C エリア基礎年次調査報告』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間発達科学専攻 COE

耳塚寛明 2006b 「教育アスピレーションの規定要因」『JELS 第8集 C エリア基礎年次調査報告』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間発達科学専攻 COE

寺崎里水 2006 「「好き」を入り口にするキャリア教育の限界—子どものやりたい「しごと」をめぐる—」『年報社会学論集』第19号、近刊

※本研究は JELS2003 による共同研究の成果の一部です。